

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問題はすべて句読点を一字に数えます。

印象的な、有名なエピソードから始めましょう。伝記物語によく出てくるガリレイの言葉です。教会によって①センデンされる天動説ではなく、コペルニクスによる地動説が正しいと信じたガリレイは、教会によって裁判にかけられます。圧倒的な教会の権威のもとにガリレイは地動説を捨てることをやむなくされたのです。地動説を捨てるというせん誓の際に、ガリレイは低くつぶやくのです。「それでも地球は動いている」と。

この教訓物語で光があたる対立は、「信じている」と「知っている」の対立です。教会は天動説を信じているのに対し、ガリレイは地動説を知っていたのだ、というわけです。

ここで立ち止まって、よく考えてみましょう。①何が「信念」、「信仰」と「知識」の差なのでしょう。

教室にいて、あるいはテレビのクイズ番組に出ていると、思ってください。その上で、次の問題に答えてください。

1 太陽が地球の周りをまわっているのでしょうか？ それとも、地球が太陽の周りをまわっているのでしょうか？

2 燃えているロウソクにガラスをかぶせたら、火が消えました。なぜ火が消えたのでしょうか、説明してください。

さて、できたでしょうか。次のような答になったことと思います。

1 地球が太陽の周りをまわっている。2 グラスの中にある限られた量の酸素がすべて燃焼したため。ここで、わたしは、あなた方に、「なぜ、それらの答が正しいのかを説明できるだろうか」と考えてほしいのです。簡潔に言えば、「あなたはそれらを信じているだけではないのか？ ほんとうに知っているのか？」と、わたしは問いかけているのです。

最初の問題を考えてみましょう。あなたは「地球が太陽の周りをまわっている」と言いました。すなわち、あなたは、「地動説」を唱えているのです。その根拠はどこにあるのでしょうか？ あなたはどこか太陽と地球の見渡せる不動の場所に行って、地球が太陽の周りをまわっているのを見たことがあるのでしょうか？ そんなところに行ったことのある人間はいません。すなわち、あなたは、観察によって地動説の正しさを直接に知っているわけではありません。それではいったいどのようにしてあなたは地動説の正しさを確信しているのでしょうか。「天動説では説明できないことを地動説では説明できるからだ」と答える人もいます。それでは、あなたがタイムスリップして、コペルニクス以前の世界にやってきた状況を考えてください。あなたの周りの人々は天動説を信じています。あなたは彼らに地動説が正しいことを説得することができるのでしょうか。

プトレマイオスの⑥タイケイ(天動説)は、数学的に精緻を極めています。じつさい、コペルニクスの時代、プトレマイオスのタイケイの方が、コペルニクスのタイケイ(地動説)よりも天文の運動をうまく説明できていたと言います。あなたはどんな⑦ジレイを使って地動説を説明すればよいか途方に迷ってしまうでしょう。見た目は、もちろん、太陽が動いています。②どこか宇宙の動かない点に彼らを案内して、地球が動いていることを示すことは、もちろん、できません。日食や月食にしても、あなたの説明よりは、天動説を信じる彼らの方がよっぽど上手に説明してくれるでしょう。けつきよく、天動説を唱える彼らを言い負かすだけの③をあなたは持っているのです。あなたには「彼らは太陽が地球の周りをまわっていると信じているが、わたしは地球が太陽の周りをまわっていることを知っている」と言う資格はないのです。

第二問に移りましょう。酸素って何ですか？ 説明ができますか？ もう少し具体的に問いかけてみましょう。昔は、酸素というものがあると考えられていました。ものが燃えたと、酸素がそのものから空気中に④カクサンしていくのです。グラスの中のロウソクが燃えつきるのは、グラスの中に酸素が充滿してしまい、もうこれ以上ロウソク

問題用紙二枚で五十五分)
◎解答はすべて三枚目の解答用紙に記入しなさい。

クから酸素が出ていかなかったからだ、と説明されていました。あなたは酸素を信じる一八世紀の科学者に酸素説を説得することができますか？ 「ばかだなあ、酸素が物体の外に出ているのではなくて、酸素が物体の中に入っているんだよ」と言っただけでは、もちろん一八世紀の人びとは納得しないでしょう。「グラスの中のロウソクが消えたのは、空気の中の酸素がなくなったからだ」と言おうと、その説得力は「グラスの中に酸素が充滿している」という説明と④同じだけの説得力しかありません。あなたに純粋に近い酸素を作るだけの知識があったとしましょう。そして、酸素でいっぱいになるグラスの中にロウソクを入れ、炎が大きく燃え、という実験をしたとします。しかし、一八世紀の人びとは、それを「酸素のなくなった空気」と呼びます。空気の中に酸素がないから、物体の中の酸素が勢いよく飛び出るのです。だから、炎が燃え上がるのです。じつさい、一八世紀の人びとはあなたに質問するかもしれません。「もし燃えるということが、物体の中の酸素が出ていくのではなく、物体の中に酸素が入っていくのであるとすれば、木は燃えると、なぜ、軽くなるのだい？ 酸素が出ていったから軽くなるというのなら当然だが、あなたの議論では木の中に酸素が入っていくというのではないか。なぜ酸素の入っていたという灰は、燃える前の木より軽いのだ？」と。あなたが酸素説を唱える一八世紀の人びとを説得することができるとは考えられません。あなたは「⑤」と言う資格はないのです。

あなたは天動説を信じている人に地動説を納得させることもできません。あなたは一八世紀の科学者に酸素説を納得させることもできません。あなたはこれらの答を「知っている」のではないのです。単に「信じている」だけなのです。それでは、いったいどうしてあなたは「信じて」しまったのでしょうか？ 答は簡単です。学校の先生がそう言ったからです。教科書にそう書いてあったからです。

⑥あなたは「未開人」とどこも違いません。
(中川敏『言語ゲームが世界を創る』による)

問一 ④⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ①について、筆者はどう考えているのでしょうか。説明しなさい。

問三 ②を言いかえるとどういうことですか。それを説明した次の文の⑦に入る語を本文より抜き出しなさい。

⑦によって地球が動いていることを示す。

問四 ③に入る語を答えなさい。

問五 ④はなぜそういえるのですか。説明しなさい。

問六 ⑤に入る文を三十字以上四十字以内で答えなさい。

問七 ⑥でいう「未開人」とはどのような人のことですか。説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問題はすべて句読点を一字に数えます。

子どもの頃、「嫌いな野菜」のベストスリーに、トマトは必ずランキングしていた。硬くて青い部分の残っているトマトなら、まだなんとか食べられたのだが、完熟している真っ赤なトマトとなると、完全にお手上げだった。

あのジュルジュルした食感と青くさいにおい、口の中ではじけるように飛び散るヌメツとした種。ハンバーグのとなりにあっても、サラダやスープの中に隠れていても、私はその赤い実のかけらを丹念に探し出し、皿のすみっこに追いやっていった。

小学校の五年生くらいの時だったろうか。夏休みのある日、庭から私を呼ぶ父の声がした。とても暑い日で、私はアイスクリームを食べながらテレビをみていた。

「友香ちゃん、ちよつと来てごらん」

正直なところ、真夏の太陽がジリジリと照りつけている庭に出るのは①おっくうで、その上、思春期に片足をつっこんでいた当時の私に、父との会話はもつとおっくうだった。

しばらく聞こえないふりをしていると、今度は母が声をかけてきた。

「友香子、お父さんが呼びよんなはるよ。早く来んね。それよか、宿題は進みよるとね？」

めんどくさいな……と、思いながらも、母の②を聞くよりは、父の話の聞くほうが楽し、早く③スむや。そう思い直して、私は麦藁帽子を手に取り、庭へ出た。

父は、庭の真ん中に立っている榎の木の下にしゃがんで、何かをじつと見つめていた。白いランニングシャツにステテコ姿で、大きな麦藁帽子をかぶっている父は、首にぶら下げたタオルで④ビタイの汗をふきながら、私をそつと手⑤マねいた。

「何か、おると？」

「今、背中のところ割れたもんな。もうハネが出てくる」

父が見つめていたのは、まさに今、羽化しようとしている蟬の幼虫だった。初めて目にするその光景に、私は軽く圧倒されながら、父の横に並んでしゃがみこんだ。

「蟬の羽化なんて、なかなか見られんよ。お父さんは初めて見た」

父はにっこり笑ってそう言うのと、

「カメラば持つてくるけん、ちよつと見とつてごらん」

と、私の肩に軽く手を置き、家の中へ入っていった。

私は、まばたきもおしむような気持ちで、蟬の羽化に立ち会った。薄い緑色をした半透明のハネが、飴色の硬い殻を少しづつおしのけて盛り上がる。柔らかいハネが、殻に引っかかって破れてしまいそうな気がして、そつと殻をこわしてやりたい衝動にかられたが、必死に生まれ出ようとしている蟬の幼虫に、私はどうしても触れることが出来なかった。

しばらくして、カメラを持った父がもどってきた。蟬の羽化に③③になっている私を満足そうにながめながら、父は何度もカメラのシャッターを切った。

「まだ、ハネも出てきとらんね。もういつとき時間のかかるよ、友香ちゃん。暑いけん、一回家に入つてこうか」

「よか。もうちよつと見とく」

父は、口元に微笑をうかべながら、④軽く二、三度うなずくと、自分の首に巻いていたタオルを私の首にそつとかけて、

「暑いけんね、樹の陰から出らんようにしなさいよ」

そう言って、家の中に戻っていった。

それから、どれくらい時間が経っただろうか。陽がまたむき、台所から夕飯を作る母の包丁の音が聞こえてきても、私はその場所からはなれなかった。そして、とうとう最後まで、蟬の羽化に立ち会ったのだった。

陽はすっかり落ち、夕風が、縁側の風鈴をチリンチリンと鳴らしていた。テレビから、昼間の高校野球の結果を伝えるニュースキヤスターの声が聞こえていた。

私は高揚した気持ちのまま、夕食の卓につくと、久しぶりに自分のほうから父に話しかけた。

「蟬が出てくる時ね、殻を破ってやりたくなったけど、触りきらん

問題用紙二枚で五十五分)
◎解答はすべて三枚目の解答用紙に記入しなさい。

かった」

「それは、触ったらいかん。触らんでよかったよ」

「うん」

⑤誰にも教わらんでも、蟬は自分で羽化する時ば知つとつて、自分の力で殻を破る。苦しそうに見えて、手伝ってやりたくなくても、やつぱりそれはいらん世話だもんね」

父は少し微笑んで、やさしく私にそう言った。その笑顔が、なぜだかとてもさびしく見えて、私は胸が痛くなった。

その日の夕飯は、父が大好きな水餃子だった。そえられたサラダには、真っ赤に熟れたトマトが、たつぷりに入っていた。

手を合わせ、食前のあいさつをすませると、父はおいしそうに餃子を食べ、トマトに箸をつけた。静かに食事をする父を見ながら、私は、⑥無性に父を喜ばせたい気持ちになって、サラダの中に入っている、とりわけ大きなトマトを、勢い良く箸で突き刺し、息を止めて口の中に放りこんだ。

完熟したトマトは、ジュルツと音を立てて口の中に広がり、青いにおいが鼻の中に流れてきた。

(食べたよ！)

そんな気持ちで父を見た。父は少しおどろいた表情で私を見た後、すぐにいつもの微笑を口元にうかべて、

「おいしかったね？」

と、たずねてきた。

私は、⑦なんだか恥ずかしい気持ちになつて、父から目をそらすと、もうひとつトマトを口に入れた。青くさいばかりだと思つていたトマトは、予想外のあまさをもつて私の口の中ではじけ、気持ちよくのどを通っていった。

それから三年後、父は体調をくずし、しばらく床にいた後、私が十八歳の時に他界した。最期まで、感情をあらわにする事はなく、おだやかなまま逝った父を想う時、私はきまつて、飴色の殻から抜け出そうとしている半透明の蟬の羽と、真っ赤に熟れたトマトを思い出す。父が言おうとして口に出さなかった事、伝えようとして伝えられなかったものに、私はいつかたどり着けるだろうか。そんな事を考えながら。

(森山友香子『蟬とトマトと父の思い出』による)

※(注) 思春期：異性(この場合は父親)を強く意識しだして、精神的にも不安定になる時期。

羽化：蟬など虫のさなぎ(最終時期の幼虫)が姿を変えて成虫となること。

衝動：よく考えずに急に何かをしようとする心の動き。

問一 ④⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ①⑥のここでの意味として適当なものを次のア～エから選んで、記号で答えなさい。

- ① ア 無意味で価値がなくて イ 不得意で苦手で
ウ 興味もなくつまらなくて エ めんどくで気が進まなくて

問三 ②③に入る適当な言葉を、それぞれ次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- ② ア 繰り言 イ 小言 ウ 泣き言 エ 片言 オ うわごと
③ ア 意地 イ くぎ付け ウ 馬鹿 エ さま オ 絵

問四 ④「軽く二、三度うなずくと」は「父」の満足している様子だと考えられますが、「父」はどのようなことに満足していますか。三十字以内で説明しなさい。

問五 ⑤の「蟬」の話で、「父」は「娘」にどういうことを伝えたかったのですか。次の形式で答えなさい。ただし、Aは七十字以内の文章とします。

(A) ということ。その時、親は (B) を感じるということ。

問六 ⑦「なんだか恥ずかしい気持ち」になったのはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

気のすまないことをたのまれて当惑することがある。もつとも、これは自分がたのまれる側になったときの言いかたで、役わりが逆になるばあいも、もちろんある。

個人的な申し出を個人的にとわることについては、女性たちのほうが男よりも慣れているようである。……ようである、という①②③④の悪い言いかたは、やむをえない。そんな⑤トウケイは年鑑にもものつていないのだ。また、万一の感想が、女性との関係における私だけの体験的偏見にすぎないのだとすると、私としては(悩みの種ならさしあたり間に合っているというのに)さらに一種目、あわてて悩みはじめなければならぬだろう。

それはともかく、イエスとノーは電気のプラスとマイナスのように対称形ではない。たいていの人にとって、拒絶は承諾よりはるかにむずかしい。それがあべこべだという性格の人物は、ありがたいことに、私の友人のなかには見あたらない。

気にいらない、いやだ! と露骨にことわるかわりに、「お願いだから、私を困らせないで」などと言う女性のことばづかいが、私はきらいではない。それは、自分の意志を相手の意志というかたちであらわす思いやりの表現だと言ってもいい。が、責任の転嫁だという説明もなりたつ。

A 私を困らせないでほしい、と言っておだやかな拒絶を意味する、それとおなじようなばあいに、やはり似かよった趣旨で、「このお話はなかったことにしてくださいとありがたいのですが……」とか、「そのことはどうか忘れてください……」というようなことばづかいも、ありうる。もつとも、こういうせりふは、借金でも恋でも、とにかく申し出たほうの人物が(相手の困惑を見てとって)穩便に撤退するときのことばにもなるだろう。

無論、②自分の意志を、さながら相手の意志に依存することからのように言うのだから、優しさにあふれているとも見られるし、ずるいとも考えられる。不思議なことに、優しさとずるさはときどき瓜ふたつに見えるのだ。

文字どおりにとれば、もちろんそういうせりふは矛盾している。現にあつたことをなかつたことにするなどというすばらしい⑥グイトウは、たぶん神様やSF作家の特権であつて、並の私たちには、時間の流れをさかのぼって都合の悪いできごとを消す仕事は無理であろう(思い出しても⑦セキメンするような、消しゴムで消してしまいたい出来ごとはいくらでもあるのだけれど)。

また、「忘れる」とは、どう考えてみても、ついうつかりおこなうことであつて、③的にできることではない。たとえば、驚いてくれとか、眠くなつてくれなどと真剣にたのまれたときは、どうすればいいのだろう。

B 好意のあふれたにこやかな顔の相手から、ひどい味の料理のおかわりをすすめられたとき、④並のおとなは、ちよつとした苦境におちいる。よその土地をおとずれている旅行者としてなら、どうもこういうご馳走には慣れていませんので、苦手で……と、すなおに言えるけれど、現に同じ文化圏のなかに生きている人間どうしの訪問客としては、なかなかつらいことになる。

子どもなら、「ぼく、こんなまずいもの、もうたべたくない」と、平気で言えるのかもしれない。もちろん子どもにもよるのだろうが、ともかくおとなは、ときどき子どもたちの率直さをうらやましがらる。いかにも、率直は純真や正直にも似ていて、その上、意味の伝達という点で、⑤的でさえある。

昔から言語表現について、《率直》は一般に重要な美德と見なされてきた。しかし、ためらいもなく「こんなまずいもの」と言える子どもの率直さは、じつはおこがましい自己中心主義の別名でもある。⑥子どもは、自分の心のなかにある自己流の辞典一冊を、それこそ唯一の《標準版》だとかたく信じていて、別の人の心のなかにはまた別の版の辞書がありうるとは、想像もしない。自分にとって「まずい」ものが別の人にとつ

ては「おいしい」かもしれないなどは、思つてもみない。言語表現において、率直と傲慢はほとんど見分けのつかない一卵性双生児である。

C 小学生どうしで友だちの家を訪問、というよりは遊びのために相手を呼び出す手順は、すこぶる簡明かつ便利であつた。④チイキにより、時代により、流儀はいくらかわるだろうが、いま思い出してみると、要するに相手の門前、窓のそばなどで、ただ声を張りあげて「スズキ・クーン!」とか「タナカ・クーン!」などと尻あがりに何回か叫ぶだけでいいのだ。宏大な邸宅に住むおぼっちゃんに対しては、音波の到着距離という点で実用になりにくいはずだが、そういう友だちはいなかった。ともかく、いつこうに返事がなければ、⑤ルスだということになる。

現代のおとなのようにあらかじめ電話でアポイントメント……というようなわずらわしい順序を踏む必要がないところが、簡便で、いい。そのかわり、抜き打ちの訪問を受けたほうとしては、何かの事情で、あるいはたんに気がすまないというだけの理由で、せっかく来てくれた友だちに平気で⑦門前〇〇〇をくわせてもいい。腕白のルールである。

私の育つたあたりの習慣では、窓から首だけを出して(いや、顔も出さずに声だけでもいい)、ただ大声で「アートルーデー!」という決まった文句を叫びかえせば、訪問者はあつさり納得して、ほかの遊び相手をさがしに行く。理由づけなどは無用である。前後の「アー」と「デー」を高くするイントネーションであつた。

趣旨は純粋かつ単純な拒絶なのに、なぜか形式上は、⑧「いまはだめだ」あとで(遊ぼう)という、それなりに相手の顔を立てるようなかたちの文句になつていた。もちろん、「あとで」も遊ぶ気がなくても、かまわないのである。

(佐藤信夫『レトリックの記号論』による)
※(注)傲慢: 思い上がつて人を見くだすこと。
アポイントメント: 約束。
イントネーション: 声の上がり下がりの調子。

問一 ①②③④⑤⑥⑦⑧のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ①・⑦の〇に適切なひらがなを入れなさい。ただし、一つの〇を一字とします。

問三 ③・⑤に入れるのに最も適当な言葉を、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ③ ア 機械 イ 画一 ウ 本能 エ 意図
⑤ ア 建設 イ 事務 ウ 経済 エ 打算

問四 ②について説明した次の文の①・②に、本文中から最も適当な語を抜き出して入れなさい。

「優しさにあふれている」というのは、直接にことわらないで、相手の意志にまかせるところに①の気持ちが見られるからであり、「ずるい」というのは、自分の意志でことわらない点に②からのがれようとする態度が見られるからである。

問五 ④の「ちよつとした苦境」とは、具体的にどういうことですか。説明しなさい。

問六 ⑥の、人がそれぞれに「辞典(辞書)」を持っているというのはどういうことですか。説明しなさい。

問七 ⑧は、「(いまはだめだ)あとで(遊ぼう)」という表現が、どういう点で「相手の顔を立てるようなかたち」になっているのですか。説明しなさい。

問八 本文中のA～Cの大きな段落は、それぞれが三例のことわり方を取り上げています。それらに共通するのはどのようなことですか。説明しなさい。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。字数制限のある問題はすべて句読点も一字に数えます。

雄ちゃんからの帰り道。ふと遠回りして、両親が働いている工場に立ち寄るうかな、と思った。雄ちゃんのかあちゃんの話聞かされて、親がなんとなく恋しくなったからだ。胸の奥がむずがゆいような、なんか妙な気分だ。

猛スピードで国道を西に向かった。掘って建て小屋の工場が見えてきた。僕は自転車をとタン壁に立てかけた。

「お盆明けまで？ そりゃあ、無理だ」

正面に回ろうとしたとき、工場の中から父の大声が聞こえ、僕はひるんで足が止まった。

「え、はい。そうですか。じゃあ、なんとかしますよ。はい、はい。そういうことで」

チン。受話器を置く音が聞こえた。

①僕は壁を背にして、そのままそこに腰を下ろして身を潜めた。

「何だって？」母の声だ。

「お盆明けまでに、全部納入しろだよ。ふざけんってんだ。お盆明けってことは、こっちは休みなしで働いてことだろ。まったくよ、ヤツらはお盆は休むんだろが」

父は相当おこっている。

「たまには断ってもいいんじゃないの？」

「はか。そんなことできつこねえ。じゃあ、他に回すって言われちゃう。現にあのヤロー、②そういう匂わし方をする。おとしやがって。それもえらそうに。クソおもしろくねえ。前の担当者はい人だったがな。あの若いのに代わってから、いつもギリギリになって言ってくる。去年のお盆もそうだった」

父の声はだんだん大きくなる。どうやら今夜は近寄らない方がよさそうだ。もうこのままここを離れよう。

「じゃあ、今年のお盆もどこにも行けないね」

「ああ」

「うちの子も、どっか遊びに連れてってやりたいけど」

「だから、そんなひまがどこにあるっ」

「だったら、もう期待させるようなことは言わない方がいいよ。去年だって、万博に連れてってやるって、あんだけ喜ばせておいて。フミがかわいそうだよ。とうちゃんは、飲んじやうと気が大きくなるんだから、気をつけなよ。ホント、悪いくせだよ」

「それとこれとは話がちがうだろ。オレだって、ヤツらを遊びに連れてってやりてえさ。だけど、仕事がなくなっちゃったら、うちはやってけねえぞ」

「そうだね」

「百姓やってたって、食うだけしか稼げねえから始めた仕事だ。それにうちだって建て替えてえしな。近所だって、みんなうちを新しくして。オレだって、うち建てるのが夢なんだからな。それには今、いやな思いをさせられようが、休みがとれなからうが、我慢して働くしかねえだろ。稼いでうち建てたら、ヤツらにだって部屋も持たしてやれるし、新しい机だって椅子だって、おお、ふかふかのベッドだって、全部そろえてやる。だれにも文句は言わせねえ」

「ホントだね。だけど、いつになったら楽になるのかね。あの子たちには、こういう思いをさせたくないけど。この先、どうなることやら……」

③母が最後に大きなためいきをつくのが分かった。

「オレだって、あいつらの将来のことを考えてねえ訳じゃねえさ。美幸はまだ分かんねえけど、文弘のヤローは、じいさんに似たんだろ、頭のできがいい。だったら、いい大学だって行かしてやりてえしなあ」

「あれ、工場、つがせる気じゃなかったのかい？」

「こんなもんやってしようがあるめえ。あいつがホントにできがいんなら、下請けみてえにペコペコ頭下げる側じゃなくて、下げさせる方になんきや意味がねえんだ。それには大学くらい出してやんねえと。」

あいつにはいやな思いはさせたくねえ。なのによ、まったく。親の心子知らずだ。あのヤロー、歯向かってくるばかりだ」

オレって期待されてるんだ……。あのとうちゃんが、オレに……。

「とうちゃんも、ちゃんとそういう気持ちを持てばいいんだよ。もう、ごまかしとかきかない年なんだから。いつまでも、文弘だって子どもじゃないよ」

「そりゃあ、そうだろうが」

「とうちゃんが、ぶつきらばうに接するからじゃないのかい？ 不器用なんだから」

「そんなことはねえさ」

「まったく、親子して反抗期かい。こりゃあ、どうしようもないね、はは」

両親の話を盗み聞きしているうちに、むずがゆかった胸の奥が、次第に苦しくなってきた。

「子どものことを心配しない親なんていやしないよ」雄ちゃんのかあちゃんに言われた言葉が聞こえた気がした。

④なんだか急にすまない気がした。自分でもよく分からないまま、いてもたってもいられずに、僕は立ち上がると、熱気のこもった工場の中に入った。

「あれ、フミ。何しに……」

段ボールの裁断屑を集める作業をしていた母が僕に気づいて声をかけた。

僕は母に答えることなく、段ボールの屑を工場の表にある屑山に運び始めた。今の僕にはそれくらいのことしかできないんだ。

「何やってるっ」父がどなった。

「手伝う」

僕はひと言だけ答えると、また屑を抱えて表に運んだ。

「何が手伝うだ、じゃまだから帰れっ」と父が大声を上げる。

それでも構わず、また僕は屑を両手いっぱい抱え、屑山に運ぼうとした。

「余計なことをするなっ」

いらだった父は僕に近づくと、僕の首根っこをつかんで工場の外へ連れ出し、つき飛ばした。僕は真後ろに尻餅をついた。転んだ勢いで屑が宙に舞う。僕は膝をついて地面にはいつくばると、散らばった屑をかき集めた。

「さっさと帰って勉強でもしろっ」

「たまには手伝って言ったじゃねえかっ」

拾った屑を屑山に捨てると、僕はまた工場の中にもどろうとした。

(森 浩美『夏を拾いに』による)

※(注) 万博：当時大阪で開かれていた博覧会。

問一 ——— ①で、なぜそのようなことをしたのですか。説明しなさい。

問二 ——— ②「そういう匂わし方をする」について、

1 「匂わ」すとはどういう意味ですか。答えなさい。

2 「そういう匂わし方」によって相手はどういうことを言おうとしていたのですか。説明しなさい。

問三 ——— ③で、このためいきにはどういう思いがこめられていますか。説明しなさい。

問四 ——— ④で、どのようなことに対して「すまない」と思ったのですか。説明しなさい。

問五 この話の続きにおいて、「母」が「まったく、親子でばかんだから」と「あきれたように」言っています。それは「父」と「僕」のどのような共通点についてそう言っているのですか。六十字以内で説明しなさい。

考 查 番 号

[illegible]